



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	質疑応答
Citation	子ども発達臨床研究, 6, 31-31
Issue Date	2014-12-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57568
Type	other
File Information	AA12203623_06_31.pdf



質疑応答

- 辻：質問または後半の全体討論につながるような問題提起となるご意見をお受けしたいと思います。
- 質問者A：宮崎さんの報告の「地域」というのは具体的には何のことを指しているのでしょうか？どうしてかという、理論的には1980年代ぐらいまでの思想の話だったので、現代の日本の地域問題という具体的事象を考えたときの地域は、何を問題にしているのかということを知りたいです。もう一つ宮崎さんが言われたことの一番最後のあたり、「因果のみならず縁を含めた総体にかかわる学習の組織化の可能性」というのは学習の被学習的あり方の重要性の指摘だと言えると思いますが、その一方で主体という概念を維持するというアンバランスを持っていると思ったのですが、この辺どんなふうに自覚されているのかお聞きしたいです。
- 宮崎：地域というのは真壁の理論だったら農村地域ですから、農業という産業、労働をベースにして自然と人間の循環が行われているエリアを指しています。
- 質問者A：しかし、そういうのは今ないですね。農村は従事している人の平均年齢が60歳を過ぎて、それどころではないのでは。
- 宮崎：自然との関わりなしには人間の生活が成り立たないし、起きている問題の本質は同じだと思います。あえて60年代を取り上げたのは、開放経済体制が始まる時期なんですね。まさに開発が日本の国内に入ってくる時期で、現在のグローバリゼーションにまつわる問題が始まった時期と私は理解しており、そこでこそ問題がクリアに見えていたのではないかと思います。量的には確かにAさんがおっしゃるとおりの現象が起きていると思いますが、質的には同じ問題ではないかということです。縁の問題については、学習の被学習的というのは良く分かりませんが、メタレベルを変革するような主体の在り方が問われている。これは今日取り上げませんでしたけれども、念頭にあるのはベイトソンのいう学習の階型論で、全体性を作り替えていくようなレベルの学習がどう成り立つのかということなんですが、その場合にも主体という言葉は当然使えると私は思っています。
- 間宮：僕も東北出身なんで、3.11以後いろいろ考えているんですけども、どうして真壁に注目したのかなと思いました。
- 辻：第一部では、前半は発達という言葉、後半は開発や発展といった言葉をキーワードとして報告がなされました。Developmentという概念を繋げて突き通してみると、何が見えて、何が見えなくなってくるのか、後半の議論につなげていくことができたと感じました。また、個人、集団、地域社会、国家という形で報告のフィールドが大きくなっていききましたけれども、そこでもDevelopment概念の捉え方から、開発とか発展とか成長とかがどうクロスしてくるのか、時代的な経緯を含めて後半でいろいろ議論したいと感じました。
- 宮崎：Aさんの質問の「地域」ということですが、川田さんの発表と水野さんの発表を聞いて、発達なるものを捉えるときの単位をどういうふうに設定すればいいのかという論点が浮かび上がってきた気がします。個人単位ではだめで、関係とかエコロジカルな視点。私もそのように考えるのだけれども、Aさんは地域を発展なるものを議論する単位だと言った時に、その実体が果たしてあるのかを問われたと思います。そういう意味で、Developmentというものを考える時の単位をどういうふうに考えればいいのかという質問だったと思います。